川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2014年

8月5日

世界の平和への願い

イスラエルとハマスはエジプトの仲介で７２時間の人道的停戦に合意した。ガザ地区ではすでに 2000 人に近い犠牲者が出ており、しかもそのほとんどが子どもという事実に国際社会は強くイスラエルを非難している。逃げ場のないガザの人々は国連が運営する学校など避難所に身を寄せていたが、イスラエル軍はこのような国連学校すら空爆し多数の民間人が犠牲になっている。安全なシェルターはどこにもないのがガザの現実である。

3 日日曜日にはイスラエル軍は再度国連学校を空爆し 10 人の民間人の犠牲者と多数の負傷者を出した。国連学校が避難所であることはイスラエル軍にはあらかじめ伝えてあったため、蕃国連総長の怒りは頂点に達している。

蕃国連総長は「道徳的に許されない暴挙であり犯罪だ」と強いことばで非難し、アメリカ国務省も「恥ずべき行為」と強い表現でイスラエルを非難するコメントを出した。これ以上イスラエルをかばいきれないというアメリカの苦しい立場が見て取れるコメントである。

軍事的にはイスラエルはハマスを圧倒しているが、世界的な世論はイスラエルに非難が集中している。 8 月 2 日、ホワイトハウスの前ではシカゴ、ニューヨーク、フロリダなど全米各地から集まった数千人がデモ行進をした。また、テキサス州の首都でもイスラエルを非難するデモが発生、「テキサスはガザの味方だ」とのプラカードが掲げられ、州議会議事堂を目指す多くの人々が列をなした。

パリでは 1 万人を超えるデモが起こりイギリスでは各地でデモが発生、ヨルダン、アイルランド、インド、ベネズエラなど世界各地の市民が立ち上がっている。さらにイスラエルの首都テル・アビブでも数百人の反戦デモが発生し 14 人が逮捕された。

いったん振り上げた拳を降ろすことは難しい。政治的に戦闘を止めることはできなくても世論が止めることはできるかもしれない。昨年 9 月にはシリア攻撃を止めるのに大きな影響を与えたのは世界中の人々の平和への願いだった。再び世界中の気持ちが平和へと集束すれば、悲惨な戦闘を終わらせることができるかもしれない。

8月17日

イラク空爆の行方ーシリアとイラクとISIS

アメリカはイラク北部のクルド人自治区で攻勢を強める ISIS に対して空爆を実施した。空爆とほぼ同時期にイラク大統領は新しい首相を指名、マリキ首相は辞任に追い込まれた。かねてからアメリカ政府はマリキ首相に退陣を要求していたが、マリキ首相はそれを拒否し続けていたものの新しい首相指名を受けて退陣を受け入れた。

クルド人自治区の軍であるペシュメルガと ISIS はモスル北部のダムの支配を巡って争っていたが、米軍の空爆支援によってクルド人がダムを掌握した。だがいくつかの街ではクルド人とアラブ系イラク人との対立が深まっている。クルド人から見れば地元のアラブ系イラク人は ISIS に対して密かに支援をしているというのだ。同じスンニ派であるとしてもここでは民族間対立に発展しかねない危機が高まっている。

一方イラクとの国境をはさんだシリア側では、シリア反政府軍はシリア内の ISIS に対して空爆するようにアメリカに要求を始めた。数ヶ月前にはシリア反政府軍はアサド政府軍に対する空爆を要請して却下されていたが、いまでは彼らの敵は ISIS となっているようである。だがイラクと異なりアメリカがシリア領土内を空爆することは困難である。

ISIS にしてみれば、イラクで空爆されればシリアに逃れシリアで空爆されればイラクへ逃れるだけのことであり空爆は根本的な解決にはほど遠い。むしろ ISIS は反米感情を煽ってジハードを宣伝しやすくなるだけであり、空爆の効果はほとんどないとも言われている。

EU はクルド人自治区への軍事支援を各国の判断に委ねることとし、事実上軍事支援にゴーサインを出した。フランスはすでに支援物資を送り、イギリスは準備段階に入っている。ドイツは紛争地域への軍事支援は禁止されているためおそらく支援には消極的であろう。オーストリアは支援はしないと表明しており対応は分かれている。

アメリカでは 7 月の世論調査では５５％がイラクに関与すべきでないと考えている。ようやく撤退して長い戦争が終結したのに再び戻ることはありえないというのが民意である。今回イラクを空爆したオバマ大統領はその世論を受けて今後どのように関与するのかあるいは関与しないのか。イラク戦争に反対して大統領に当選しノーベル平和賞を受賞したオバマ大統領の資質が問われている。

8月19日

アメリカの深い闇

8 月 9 日、ミズーリ州の街ファーガソンで 18 才の黒人少年マイケル・ブラウンが白人の警察官に射殺された。この発砲に対して市民は強く反発し日曜日には暴動が発生した。暴動に対して警察は武装車両や催涙弾など強硬な態度で臨んだため市民の怒りはエスカレートし、非常事態宣言が出され夜間の外出が禁止となった。それでも市民の暴動は収まらず、ジェイ・ニクソン州知事は州兵の出動を決定、ファーガソンは不穏な空気に包まれている。

２００８年、アメリカでは黒人大統領が選出されて人種の壁を乗り越えたとだれもが感じた。それが白人警官によって黒人が射殺されると暴動が起こっている。その現実にオバマ大統領はデモ隊に対して「良識あるデモを行って欲しい。暴力ではなにも解決しない」と訴え、州知事にも穏やかに対処するように求めなくてはならなくなっている。

マイケル・ブラウンの遺族は警察当局の検視を信用せず独自に検視を依頼した。一方でオバマ大統領は司法省に検視を実施するよう指示し、早急な真相の解明を要求した。

遺族の依頼した検視によれば、マイケル・ブラウンは６発の弾を受けそのうち２発は頭部である。特に頭頂部の被弾が致命傷であるとの結果が出た。この頭頂部への

被弾は「１８０センチを超えるマイケルがいったいどういう姿勢をとれば頭頂部に弾が当たるのか。答えは明白だ」と、遺族側の疑惑と怒りを増長させている。

ピュー･リサーチ･センターの世論調査によれば、マイケル・ブラウン射殺事件は「重大だ」と深刻に受けて止めている黒人は８０％に達するが、白人では３７％しか深刻に捉えていない。また７６％の黒人が捜査を信頼していない。捜査を信頼しない白人は３３％程度である。オバマ大統領は感情を抑えて「アメリカ市民として、今度こそ人種の壁を共に乗り越えよう」と国民に訴えた。アメリカにはまだ深くて暗い人種の溝が横たわることを改めて思い知らされる。

8月23日

打つ手なしのオバマー刻々と迫るISISの脅威

クルド人自治区の ISIS への空爆を開始しておよそ 2 週間経つが、状況は進展せずかえってオバマ政権は追い詰められている。オバマ政権は、イラクのマリキ首相に代わり新しい首相が誕生し政治改革によって状況が改善するのを期待していた。

だが、ISIS に拘束されていたアメリカ人ジャーナリスト、ジェームズ・ホーリーが処刑される動画がネット上に流れ、オバマ政権の動揺は隠せない。本気で ISIS を殲滅しないとアメリカへの脅威が高まる、とオバマ大統領への圧力が強まっている。

ディンプシー統合参謀本部議長は「イラクだけでなくシリアも含めた包括的な戦略がなければ ISIS を押さえ込めない」と発言した。確かに ISIS の支配地域はイラク西部とシリア東部にまたがり、戦闘員は自由に往来している。イラクを空爆しても彼らはシリアに逃げるだけである。

シリアを攻撃対象に含めるには、オバマ政権が退陣を求めるアサド政権との協力関係を構築することが必要である。アサド政権と協力することはアメリカが支援してきた反体制グループを裏切ることを意味する。

さらにアサド政権を支援するイランはもちろんロシアの協力も不可欠である。イランはともかくロシアとはウクライナ問題で険悪な関係に陥っている。

また、周辺国の協力も必要である。サウジアラビアとの関係がぎくしゃくしているが、ISIS と闘うためには関係の改善が必要であろう。

そしてなによりも 10 年を超えるイラク戦争からようやく撤退したにもかかわらず再び関与することになるとするならば、国民に納得してもらい世論の支持を得なければならない。そしてシリアへと戦域が拡大することも覚悟しなければならない。おそらくオバマ政権の中での最も難しい局面となるであろう。